大学生の人生観の年代的变化

国際基督教大学 岡林秀樹・大井直子 亜細亜大学 原一雄

Chronological changes in college students' view of life

Hideki Okabayashi, Naoko Ooi (Division of Education in Graduate School, International Christian University, Osawa, Mitaka 181) and Kazuo Hara (Asia University, Sakai, Musashino 180)

This study examined the changes in college students' view of life through three periods: the 1960s, 80s, and 90s. Approximately 3 000 students at a liberal arts college responded at least once during the periods to a questionnaire with 13 descriptions (13 Ways to Live; Morris, 1956). Factor analyses, with principal component analysis and varimax rotation, found four factors that were common to the three subject groups. An examination of factor scores revealed that the first factor, "Sympathy and Service," decreased while the fourth, "Comfort and Variety," increased in the 80s and 90s, suggesting that an individualistic yet conforming tendency became more prominent in the latter periods than the 60s. While the third factor, "Active Action," increased during the four college years in the 60s, it decreased in the 80s. These changes may have reflected the campus unrest in the 60s and the subsequent student apathy in the 80s. A recent increase in the fourth factor, especially among sophomores, seems to reflect the current characteristics in college students' view of life, namely a "moratorium" tendency.

Key words: college students, chronological changes, factor analysis, value orientation, view of life.

本研究は、社会が目まぐるしく変動し、社会的規範が不安定である現代において、青年期後期にあたる大学生が自らの人生観を形成していくのかを、過去の資料と比較しつつ検討することを目的とする。具体的には、大学生の人生観について(1)異なる時代を通して共通の因子を抽出し、(2)その因子構造をもとに時代的变化の特徴を指摘し、更に(3)各時代における在学中の変化について検討する。

Morris(1956)は思想史上の主な人生哲学の内容を分析し、価値の基本的要素として、“ディオニソス要素”、“プロメテウス要素”、“ブッダ要素”という3要素を仮定し、それらの組合せによる13の人生哲学からなる質問紙を作成した。米国・インド・中国・日本・カナダ・ノルウェーなど世界各国の大学生に対する比較文化的調査により、文化の違いにもかかわらず共通した5因子を抽出し、これらの因子を最初に仮定した3要素に対応する三つのカテゴリー(“依存型”、“支配型”、“超越型”)に分類した。この3要因説に対し、国際基督教大学(以下ICUと略称)における一連の研究は、現代の学生の特徴をよく表す項目の動向に注目し、上記の3次元に更に1次元を加えた4因子構造をもとに分析を試みている(原・大井・岡林, 1991, 1992; 大井・原・岡林, 1991; 大井・岡林・原, 1992; 岡林・原・大井, 1991; 岡林・大井・原, 1992)。そこで本研究では、まず第1の課題として、

時代の異なる被験者群に対して別々に主成分分析を施し、この4因子構造がどの被験者群にもあてはまるか否かを検討する。

また、Morris & Small(1971)はアメリカにおいて50年代と70年代の大学生の人生観を比較したが、日本においても、九州大学の安藤(1978)とICUの岩崎・石塚・原(1984)が同様の時代的比較を行っている。安藤(1978)は、日本における1949年、1964年、1973年の資料とアメリカにおける1949年、1971年の資料を比較し、この四半世紀に生じた我が国の大学生の人生観の変化を以下のようにまとめている。“戦後の十数年間(1949-1964)は、禁欲主義の生き方への選好を保持しつつも、大勢としては柔軟で多元的な生き方への傾斜を強めていき、更に最近の十年間(1964-1973)においては、その傾向がますます増幅され、ついにはアメリカの価値のパターン(特に1971年)と、一見区別しにくいほどの類似を示すにいたっている”(安藤, 1978, p.151)。彼はこのような傾向を“アメリカナイズーション”と呼び、50年代から70年代にかけて日本の大学生が抱く人生観の変化に見られる特徴と考えた。また、岩崎他(1984)はICUにおいて80年代と60年代の大学生の人生観を比較した。その結果、ICUの学生は20年前と比べ、他者との協調や奉仕を嫌い、自己の欲求を抑えてまでも目標に向かって努力するよりは、むしろ安楽的で享乐的な生き方を好むこ

Table 1
 “13の生き方質問紙”の実施年度および学年別の被験者数

実施年度	60年代					80年代		90年代	
	1962	1963	1964	1965	1966	1983	1990	1991	
1年生	176	251	187	257	206	177	299	65	
学2年生		166	233	171		56		92	
年3年生						61			
4年生				153		64	59		
小計			1 800			358	515		
総計				2 673					

とが指摘され、この傾向は米国の大学生の50年代から70年代にかけての傾向とよく類似していた。これらの研究から、日本における大学生の人生観は、50年代から80年代にかけて伝統の軽視、個人主義的傾向、柔軟な態度を好む傾向へと変化していると考えられる。そこで、本研究の第2の課題は、これらの傾向が更に90年代においても引続き認められるか否かを調べることであり、具体的には60年代から90年代までの30年間におけるICUの大学生が抱く人生観の時代的変遷について検討する。

ところで、上記の人生観の時代的変遷の研究に比べ、異なる時代における在学中の変化については今までにあまり検討がなされてこなかった。しかし、学内の環境は各時代における社会の変動とともに移り変わり、それはまた学生の人生観の形成に影響を与えていると考えられる。そこで、本研究の第3の課題は、大学生が抱く人生観が在学中にいかに変化するかを各時代ごとに比較検討することである。

方 法

被験者 この調査には60年代、80年代、および90年代におけるICU在学生のべ2 673名の資料が用いられた(Table 1)。なお、その中の60年代の資料はTroyer・藤田・北山・永野・原(1963)によって、また80年代の資料は岩崎他(1984)によって収集されたものから借用した。

質問紙 “13の生き方質問紙”(Morris, 1956)の原一雄による邦訳版(青木, 1974, pp.126-129)を用いた。各生き方は古今東西の思想13類型をそれぞれ350字程度にまとめたもので、その略称(見田, 1966)と内容の概要(岩崎他, 1984)を生き方(以下Lと略記)の順に述べると、L1(中庸：人間の達成できる最上のものの理解と保存、規律と叡知の人生)、L2(達観：人やものに依存せず、自己を原点とする内省・自足の人生)、L3(慈愛：他者への愛情と共感、自己主張を抑制する人生)、L4(享楽：生の感覚的享楽と孤独の共存を尊ぶ人生)、L5(協同：集団活動への参加、他者との協調、積極的行動の人生)、L6(努力：停滞

や安楽を嫌い、不断に変革を志向する人生)、L7(多彩：時と場合に柔軟に即応し、一つの生き方に偏らない多元主義の人生)、L8(安楽：強烈な刺激は嫌うが、平穏の中で快楽を追求する人生)、L9(受容：物事があるがままに受け入れ、自然に逆らわぬ人生)、L10(克己：衝動は抑え、克己と理想と自立のストイックな人生)、L11(瞑想：外界から離れ、瞑想し、内的生活の充実を図る人生)、L12(行動：外面的な生活を尊重し、冒険的でエネルギッシュな人生)、L13(奉仕：人のため、世のため、また宇宙的目的へ献身する人生)である。評定尺度は“とても好ましくない”から“とても好ましい”までの7件法を用い、順に評定得点1から7を与えた。

手続き 調査の実施方法は各被験者群において多少異なる。60年代の在學生には大学の授業中に実施した。1990年度の1年生には郵送した。80年代と前述以外の90年代の学生には学内の個人別通信用ボックスを通して質問紙を配付した。

結 果

人生観の基本構造 全被験者の13項目に対する評定得点をもとに項目間の相関マトリックスを求め、主成分分析の後にバリマックス回転を施した結果、Table 2に示される四つの因子が得られた。更に、時代別および男女別に同様の処理を行った結果は、Table 3のとおりである。これら4因子に含まれる高因子負荷量(>.50 [絶対値])をもつ項目は、時代と性別によって多少の相違が認められるが、いずれの群とも大学生全体から抽出された4因子とほぼ同様の因子構造をもつことが示された。

時代的変遷 全被験者から抽出された因子構造をもとに各被験者群の因子得点を算出した。つまり、第I因子はL1, L3, L10, L13, L4(-)、第II因子はL2, L9, L11, 第III因子はL5, L6, L12, 第IV因子はL7, L8の各項目を各因子を主として構成する項目とし、各因子ごとにこれらの項目の評定得点を平均して因子得点とした(但し、第I因子のL4は負荷量が.50に少し足りなかったが、負荷量の絶対値が他の

Table 2
 “13の生き方質問紙”の各項目の因子負荷量($N=2673$)

項目	因子				共通性
	I	II	III	IV	
L13 奉仕	.76	-.00	.08	.01	.58
L 3 慈愛	.71	.00	-.04	.07	.52
L10 克己	.52	.24	.20	-.25	.43
L 1 中庸	.50	.07	-.17	.34	.40
L 4 享楽	-.47	.34	.24	.29	.49
L 2 達観	-.08	.72	-.04	-.04	.53
L11 瞑想	.14	.72	.01	-.07	.54
L 9 受容	.04	.59	-.04	.41	.52
L 6 努力	.08	-.02	.78	-.10	.63
L12 行動	-.18	.03	.71	.07	.54
L 5 協同	.39	-.30	.50	.14	.52
L 8 安楽	.07	.14	-.01	.74	.58
L 7 多彩	-.04	-.14	.06	.69	.49
固有値	2.08	1.82	1.51	1.35	
寄与率(%)	16.0	14.0	11.6	10.4	
累積寄与率(%)	16.0	30.0	41.6	52.0	

Table 3
 各被験者群において高因子負荷量(>.50)を示した項目

被験者群 (人数：男/女)	第 I 因子	第 II 因子	第 III 因子	第 IV 因子
60 年代 全体 (940/860)	3, 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	1, 7, 8
80 年代 全体 (122/236)	3, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8
90 年代 全体 (171/344)	1, 3, 13	2, 9, 11	6, 12	7, 8
男子 全体 (1233)	3, 10, 13	2, 9, 11	6, 12	7, 8
女子 全体 (1440)	3, 4(-), 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8
大学生 全体 (2673)	1, 3, 10, 13	2, 9, 11	5, 6, 12	7, 8

因子よりも大きかったため、逆転項目として第 I 因子に含めた)。この因子得点によって各時代における大学1年生の人生観の変遷を示したのが Figure 1 である。なお、ここで、大学1年生の資料を時代的変遷の資料として用いた理由は、回答数が最も多く、サンプリングに偏りが比較的少ないと考えたからである。

各時代における在学中の変化 因子ごとに、在学中の変動を三つの時代別に比較した(Figure 2-1-4)。なお、60年代については1962年度入学生の1年次と2年次、および4年次の同一被験者群の資料を用いたが、80年代については1983年度の1年生と2年生と4年生を用い、90年代についても1990年度入学生の1年次と2年次、および1990年度の4年生の資料を用いた。本来ならば各時代で縦断的な資料を求めるべきであろうが、それができなかったため、60年代の

みが縦断的資料、後の二つの年代には横断的資料を用いた。また、因子得点について時代および学年による分散分析を行った。その結果、Figure 2-1 に示した第 I 因子においては、時代と学年それぞれにおいて主効果が見られた($F(2, 1235)=13.85, p<.001$; $F(2, 1235)=14.38, p<.001$)。時代について修正 LSD 法による下位検定を行ったところ、80年代と90年代が60年代より有意に低かった(共に $p<.01$)。また、学年においては、2年生と4年生が1年生より有意に低かった($p<.01$; $p<.05$)。交互作用が見られたため($F(4, 1235)=2.73, p<.05$)、下位検定を行ったところ、60年代においては1年生と2年生の間に、80年代と90年代においては4年生と1年生の間に有意な差が見られなかった。そして、4年生においてはいずれの時代においても有意な差が見られなかった。Fig-

Figure 1. 各時代における大学1年生の平均因子得点。

Figure 2-1. 時代および学年別の平均因子得点(第I因子)。

Figure 2-2. 時代および学年別の平均因子得点(第II因子)。

考 察

人生観の基本構造につき因子数を決めるにあたっては、Morris(1956)の理論的基本構造に用いられた3次元に代え、現代の学生の特徴(ここで言う特徴とは因子構造のことではなく後述する因子得点の顕著な変動を示す)をよく表す項目(L7, L8)の動向に注目するためにもう1因子を加えた4因子に設定したところ(Table 2)、高因子負荷量をもつ項目によって予測どおりのきれいな単純構造が得られた。そこで、これらの因子を構成する項目の内容から、第I因子を“慈愛奉仕”，第II因子を“内面生活”，第III因子を“積極行動”，第IV因子を“安楽多彩”と命名した。第I因子から第III因子までは、Morris(1956)の“依存型”，“超越型”，“支配型”の各カテゴリーにそれぞれ対応し、これらは人生観の基本的3要素と考えられる。しかし、第IV因子の“安楽多彩”はそれらと性格がいささか異なり、一つの生き方にこだわらず、状況に応じて柔軟に生き方を変え、平穏な快楽を求めるという特徴をもつ。これはある意味においては人生観の確立とは逆の意味をもち、小此木(1977)が現代人の社会的性格として指摘するところの、アイデンティティの確

Figure 2-3. 時代および学年別の平均因子得点(第III因子)。

Figure 2-4. 時代および学年別の平均因子得点(第IV因子)。

立を望まず、遊び感覚のうちに楽しみを享受する、いわゆる“モラトリアム人間”の特質を示す因子であると考えられる。高因子負荷量をもつ項目について被験者群を比較した結果(Table 3)から、多少の変動は見られたものの4因子構造が各時代に共通して見出された。時代が異なる被験者群は一つ一つの項目に対する解釈が微妙に異なる危険性をもつが、それにもかかわらず各時代の被験者群とも同じ意味に解釈していると思われる枠組み(共通の因子構造)を明らかにし、そのような共通の構造に基づいて各時代の資料を取り扱ったとき、心理学的に同一尺度上で比較し得ると考えられる。これらのことから、以後の分析はもっぱらこの因子構造をもとに算出した因子得点で行うことにする。なお、各時代における男女の人数比に違いが見られるが男女別に因子得点による時代変化の傾向はほぼ同じであったので本研究では性差に関しては特に触れないこととする。

時代的変遷については、全体として第IV因子の“安楽多彩”が最も好まれ、次に第I因子の“慈愛奉仕”が好まれている(Figure 1)。それに対し、第II因子の“内面生活”はむしろ嫌われている。すなわち、被験者たちは、どの時代でも他者に奉仕する精神とモラトリアム傾向を好むが、内面的な精神生活を重視する生き方を嫌う傾向を見せている。さて、60年代から80年代へかけては第I因子の“慈愛奉仕”の減少と第IV因子の“安楽多彩”の増加という変化が見られたが、80年代と90年代には際立った変化は見られなかった。このことから、60年代から80年代へかけて個人主義化と順応主義の台頭が見られ、それは90年代にも維持されていると言えるであろう。おそらく、これは60年代後半から70年代にかけて起きた学生運動の挫折により、一つの主義への傾倒を嫌うようになったことの表れと思われる。これらの結果は、50年代から80年代にかけての日本における研究(安藤, 1978; 岩崎他, 1984)が一貫して示していたところの個人主義的傾向、柔軟な態度を好む傾向への変化とほぼ同様のものであり、日本における大学生の人生観は、50年代から90年代まで、大勢としては同一方向へ変化してきていると言えるであろう。また、上記のように安藤(1978)の研究と非常に類似した結果が見られたことから、ICUの在学生の資料からも日本の大学生が抱く人生観の時代的変遷を推測することが可能だと思われる。

各時代における在学中の変化についてはFigure 2より、第I因子の“慈愛奉仕”は80年代と90年代が、60年代より減少していた。また、学年においては、2年生と4年生が1年生より減少していた。このことから、被験者たちは、60年代から80年代および90年代になるにつれて、また1年生から2・4年生になるにつれ、他者奉仕の精神から個人主義へと変化する

傾向が認められたと言えるだろう。これは、大学1年生の理想的博愛主義が、在学中に色々な経験を積むことにより、より現実的なものになったためと考えられ、またそれは60年代から80年代および90年代にかけての変化の特徴として見出された“個人主義化”が、在学中に更に進むためとも考えられる。また、80年代と90年代のみ2年生から4年生まで有意ではないが上昇する傾向が見られたのは、60年代に比し4年生の回収率が低く、回答者のなかに奉仕の精神をもった学生が比較的多く含まれていたためではないかと考えられる。第II因子の“内面生活”においては、学年において4年生の得点が1年生よりやや増加した。このことから、大学生は4年次になると自らの内面を考える傾向が強まると言えるが、この因子得点はいずれの時代においても低かったことから、大学生は自らの内面を見つめ直すことを現実逃避のたとえて嫌っていたと考えられる。第III因子の“積極行動”においては、1年次においては各年代ほぼ同じ得点であったが、4年次において、60年代でやや増加し、80年代では減少が見られ、全体的には60年代が80年代と90年代よりも高い水準を示した。入学時には“積極行動”の時代差があまりないのに、在学中にそれが広がってくるのは、学生が在学中に受ける大学環境の影響と考えられる。つまり、60年代においては、大学全体に仲間と協力し社会を積極的に変革しようという気風が見られ、それが学生に影響を与えたが、逆に80年代には大学全体の無気力的雰囲気がかつて在学中の個々の大学生に影響を与えたのではないかと推測される。第IV因子の“安楽多彩”においては、60年代から80年代、そして90年代へと大きく増加する傾向が見られ、90年代においては1年次から2年次にかけて更に増加する傾向が見られた。このことから、この因子は現代の大学生の人生観の特徴を代表する因子と考えられる。特に90年代において2年次にそれが増加することから、学年が上がるほど個人固有の人生観ないし価値観の確立を目指そうという意志は見られず、むしろ急速に移り変わる社会に流動的に対応するため柔軟な態度をもち続けようとする傾向が増大していると考えられる。このことは前述した“モラトリアム人間(小此木, 1977)”が大学生を含めた現代人一般の社会的性格としてますます主流をなしてきていることを示唆している。

以上のことから現代の大学生は、急速な社会的変化に対処せんがために、自らのパーソナリティの一貫性を重視することよりも、むしろ絶えず変容の可能性をもった柔軟な人間像を望んでいることが明らかになった。このように青年期の価値志向を通して、現代人の希求する“理想の人間像”とパーソナリティの形成過程を明らかにして行くことは、現代の心理学が求める実践的課題の一つと考えられる。

引用文献

- 青木孝悦 1974 価値 青木孝悦・萩原 滋・箱田裕司(編) 資料中心一般心理学 関東出版社 Pp. 124-132.
- 安藤延男 1978 青年学生の心理 佐久間章・安藤延男(編著) 人間行動の心理学的考察 アカデミア出版会 Pp.145-170.
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1991 大学生の価値観(1) 人生観・宗教倫理観・政治経済観研究の方法論 日本心理学会第55回大会発表論文集, 624.
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1992 ICUにおける大学生の価値観研究 アジア文化研究 国際基督教大学別冊 3, 91-100.
- 岩崎正子・石塚正一・原 一雄 1984 ICU在学生の人生観の調査研究 教育研究 国際基督教大学, 26, 85-106.
- 見田宗介 1966 価値意識の理論 弘文堂
- Morris, C., & Small, L. 1971 Changes in conceptions of the good life by American college students from 1950 to 1970. *Journal of Personality and Social Psychology*, 20, 254-260.
- Morris, C. 1956 *Varieties of human values*. Chicago: Chicago Univ. Press.
- 岡林秀樹・原 一雄・大井直子 1991 大学生の価値観(2) 人生観の時代的変遷 日本心理学会第55回大会発表論文集, 625.
- 岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1992 大学生の価値観(4) 人生観の時代的変遷(II) 日本心理学会第56回大会発表論文集, 157.
- 小此木啓吾 1977 モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 大井直子・原 一雄・岡林秀樹 1991 大学生の価値観(3) 人生観の縦断的研究 日本心理学会第55回大会発表論文集, 626.
- 大井直子・岡林秀樹・原 一雄 1992 大学生の価値観(5) 人生観の縦断的研究(II) 日本心理学会第56回大会発表論文集, 158.
- Troyer, M. E.・藤田恵璽・北山雅子・永野俱子・原一雄 1963 大学生の価値観に関する研究 教育心理学年報, 3, 9-10.

——1993. 8. 24 受稿, 1995. 1. 21 受理——